

福島区歴史研究会 会報

第九号

2017.9

目次

〈遺稿〉 天下の台所・大阪市中央卸売市場 の生い立ちと経過	1
〈追悼特集・太田会長〉	
故・太田会長を悼む！	5
太田会長の思い出	7
父、太田勝義は大阪市と福島区が大好き	9
福島区のインフラの充実に貢献した	
故太田勝義先生	10
太田会長を悼む	13
太田会長の思い出	13
太田勝義略年譜	15
野田地区の長屋現状数と民俗点描	15
「写真で巡る野田村」	
―平成二九年第一回セミナー―報告	19
―「二〇一七戦争体験を語りつぐ」	
―講演と語る会の報告―	20
上半期の事業・上半期の活動記録	24



〈遺稿〉

天下の台所・大阪市中央卸売市場の

生い立ちと経過

会長 太田勝義

中央卸売市場は福島区にとっても、オール大阪にとっても大変重要な施設であるが、市民は意外とその存在と重要性について気づいていない。

天下の台所を預かる施設は年三六五日、一日も休む事は無い。今一度、市場の生い立ちと今日までの経緯と課題について、記述しておきたい。

大阪で生鮮食料品を常設する市場が発生したのは、豊臣秀吉が天下の政権を掌握、大坂城を築城し、城下町として発展せしめるに至った頃である。

貞享元年（一六八四）には河村瑞賢によって安治川開削され水運の便もよくなり、鷺島（今の雑喉場ざごば）に出張所を設け、取引するようになった。ところが鷺島が取引上便宜が多いため、自然すべての取引が集中するようになり、付近の野田、福島等でとれた雑魚類を持参して販売するものが出たことから、鷺島という名はいつしか雑魚場となり、のち雑喉場といわれるよう

になった。

江戸時代を通じて、青物は天満青物市場、生魚は雑喉場魚市場、干魚は靱海産物市場と限定され、各市場は独占的特権を認められ、生産者の直売などはきびしく禁じられていた。

明治十年（一八七七）前後に青物市場の対岸に木津魚市場が形成され、大正二年（一九一三）十二月、難波青物市場と木津魚市場を合併して木津難波魚青物市場が成立した。

明治の文明開化にもなつて都市化した街の人口急増による食料品の需要をまかなえない状況となり、一方問屋・仲買が取引の場を拠点にして中間流通を独占するようになり、供給する農漁民からの不満も多く、公的市場がぜひとも必要だとの声が強くなってきた。

そして大正二年一月の卸売総平均物価指数を一〇〇とすると、六年一月には一四二、七年一月には一九七と急上昇、特に毎日の生活必需品である米や生鮮食料品の価格は六年に入ってから暴騰し、世論はこの物価高の原因はすべて商人の暗躍によるとして、暴利をほしいままにする商人の取締りを政府に迫った。



『大阪名所独案内』一八八二 より

こうしたなかで、大阪市では、物価上昇から市民生活をまもる社会政策的な意図から大正七年四月、当時の東区谷町三丁目、西区九条南通一丁目、南区六万休町、北区堂島浜通三丁目の四ヶ所に市設小売市場（谷町、境川、天王寺、福島）を設けて日用品を廉売し、物価の安定を図った。当初は存置期間六ヶ月に限られた試験的な応急施設の予定であったが、七年八月、富山県の一漁村から起こって全国に広がった米騒動の際、この市設小売市場で白米の廉売を行ったところ、これが大いに市民に喜ばれ、ついに恒久的施設となった。

政府も大阪市の公設市場の成功に刺激され、全国諸都市に公設小売市場の設置を奨励するようになった。

公設小売市場はここに成立したが、従来の卸売市場が価格形成の上からも、衛生設備の上からも、また貯蔵、運搬、荷役などの点からも欠けるところが多く、何かと弊害が認められたので、在来の卸売市場を改革・統合して公設小売市場の親市場をつくる必要性が各方面から一層強く叫ばれてきた。政府は大正十一年（一九二二）第四十六議会で中央卸売市場法案を上程可決されるや、一二年十一月一日施行し、まず六大都市をその設置箇所と指定した。

大阪市においては、大正十三年一月十日市場設置に関する重要事項を調査審議する機関として臨時中央卸売市場調査委員会

(委員長関一市長)を組織し、大阪府市・商工会議所・鉄道省ならびに業界等四〇余名を委員としてその審議により市場の位置を選定することになった。初め、一七ヶ所の候補地のうちから、

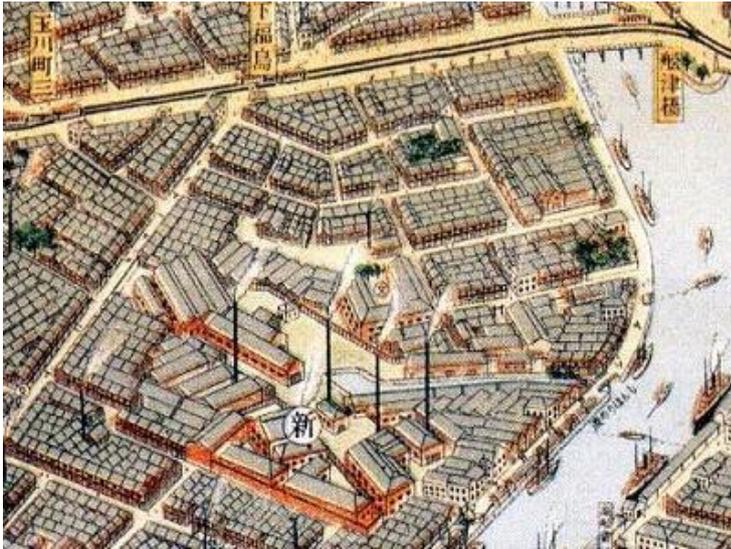
木津川沿岸三軒家付近

尻無川沿岸岩崎橋下流付近

尻無川沿い市岡付近

安治川沿い船津橋付近

の四ヶ所が選定されたが、意見が一つにまとまらず最後は関市長の鶴の一声で、大正一四年(一九二五)三月七日、船津橋橋畔の位置がほぼ市の中央部に位置しており、千屯級の汽船がさかのぼるに容易であるばかりか、鉄道も省線西成線を利用することができるという水運陸運ともに便利



開設前の市場用地

『大阪市パノラマ地図』

一九二四 より

な理想的適地として決定され、大正一四年三月二五日全国に先がけて開設認可を受けた。

しかし、市場の敷地が一二一、一一〇平方メートル(三六、七〇〇坪)を要し、予定地が工場、学校、商店、住宅などの密集地であったので、昭和三年三月土地収用事業の認定をうけたが、住民の反対運動や船会社からの岸壁専用使用の反対などもあり、土地買収や地上物件の撤去には建設期間約七年のうち約五年間の日時と折衝を要した。

当時の敷地内建物は、次のように処置された。

住友倉庫大阪支店の安治川倉庫 対岸の川口町に移転

住友伸銅所 此花区島屋町に移転

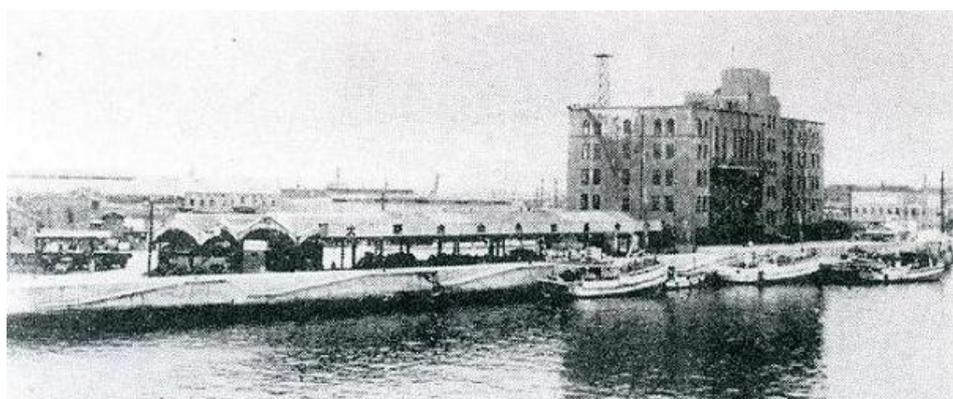
下福島尋常高等小学校 現下福島中学校の地に移転

その他住宅約三百戸、冷蔵倉庫一ヶ所 撤去

市場は昭和四年七月着工六年三月二八日完成、同年一月一日、全国で四番目の市場として業務を開始することができた。中央卸売市場の位置は、旧地名では此花区下福島三丁目と呼ばれていたが、実際は敷地が広大な面積にわたっているため、下福島三・四丁目、安治川上通二丁目、十六町のほか大野町一・二丁目、今開町一丁目、対込町、兼平町の一部にまたがっている。

安治川上通は貞享元年（一六八四）安治川が開削された頃から安治川新地もでき、この辺りはまさに出船、入船の往来でさかえ、中でも一・二丁目は曾根崎新地・道頓堀などとともに飯盛女付旅籠が許され、一般に「新堀」と呼ばれ、船員、船子の群衆する脂粉場であった。

そもそも下福島一帯の地は、日清戦争（一八九四）後の近代工業の飛躍的發展にともない、各種工場が周辺町村にその敷地を求めた結果、明治二四年撰津製油、二五年福島紡



右の建物は管理棟 『区勢小誌—福島区創設十周年記念—』1953 より

績、二六年日本紡績、二八年八月、日本製銅株式会社は当時一面の田畑であった市場敷地を約八、五八〇平方メートル立て工場建設したが、経済界の恐慌がつづき、遂に破産、三〇年三月工場を住友家に売却した。そして、同年四月市場の敷地に住友左衛門友純の個人経営のもとに住友伸銅場（大正二年に住友伸銅

所に改称）が発足した。その後、激増する需要に応じて順次工場を拡張し、昭和三年一月此花区島屋町に移転の際には、六二、四三六平方メートル（一八、九二〇坪）余りの敷地に及んだ。

また、隣地の市場正門辺りの二九、四一六平方メートル（八、九一四坪）にあった住友倉庫は、明治六年住友家が倉庫業の本部を川口の富島町に移した際、新設事務所附属の土蔵倉庫の一部を、当時付近に軒を連ねていた雑穀問屋の要請により賃貸した「貸庫」がその始めである。住友倉庫は対岸の川口町に移転、川口町倉庫として昭和三年着工、同四年一二月、六階建の近代倉庫として生まれかわり、今も勇姿を誇っている。

いま一つ下福島三丁目の敷地内には、八間道路と住友倉庫との間に下福島尋常高等小学校（市立福島幼稚園と市立下福島高等家政女学校併設）があったが、昭和三年秋、下福島二丁目（現在の下福島中学校の位置）に移り、昭和一七年三月限りで現玉川小学校（もと第一西野田尋常小学校）に吸収された。

昭和五十六年（一九八一）、中央市場開設五十周年記念式典が盛大に行われたが、市議員になって三年目だった私は関係者の多くから、開設から半世紀を経て、施設の老朽化が進み、狭隘・過密化が進み、生鮮食料品の流通環境の変化もあって、何とか早く抜本的整備をして欲しいという声を聞いた。その内、狭隘・過密については、東住吉区に市が東部市場を、茨木市に

は府が北部市場を開設し、緩和を見ていたが、老朽化はいかんともしがたく、何とかしなくてはならなかった。関係者の話し合いが持たれていたが、なかなか前へ進んでいかなかった。

私は早速、地元の議員として、政治生命を賭けて取り組まなければならぬ重要なテーマであると思ひ、時間があれば市場を歩き回った。多くの意見を聞く度に複雑にしたのは立地の問題であった。即ち今ある現地での建替えなのか、新天地を求めて北港、南港その他へ行くのか。人によって意見が分かれ二年があつたという間に過ぎた。このままでは大変な事になるので、アンケートをとってワンポイントでも多い方に同意してもらおうというのでどうかと提言したところ、市場当局も関係業界からも賛同を得た。結果は五七%が現地建替えに賛成し、それを結論とした。

参考文献

『大阪市中央卸売市場二十五年』

川端直正編 一九五七

『大阪市中央卸売市場誌』

三浦行雄編 一九七三



船津橋から見た市場

〈追悼特集・太田会長〉

故・太田会長を悼む

副会長 岡倉光男

最初の手術から約一〇年、その間一時寛解を経て再発、薬石加療の効なく多臓器不全の為、去る四月二四日、折からのノダフジ満開の下、太田勝義会長（七四）は御逝去された。

葬儀は、若年より信仰されていた天理教（神式）で行われた。

第一報を受けた時の驚き、襲ってくる悲しみに堪えぬまま、小雨そぼ降る中、二六日の海老江東コミュニティセンターでの、お通夜と次の日の本葬に、生前の業績・人柄を偲ぶ大勢の方達と一緒に、忍手の四拍手で、ご冥福を祈り申し上げました。

ご遺族様の心痛・ご落胆は、如何ばかりかと思ひやられ、ご愁傷を癒すべき言葉もありません。

思い起こせば半世紀前、野田地区で地域発展の為とて「誠友会」なる会があり、共に会員として活動、その一環として「野田新報」と表題したタブロイド版のブロック新聞を毎号五千部発行していました。創刊号は一九六八年（昭和四三）一一月で、三号までの編集責任者は私（岡倉）、四号より太田さん編集で一

九七五年（昭和五〇）八号まで、まだ市会議員になれる前でしたが、当時から社会問題に熱心で、紙面に問題提起と建設的な意欲ある論陣を張っておられました。

今から一六年前、野田小学校『創立一〇〇周年記念誌』を二年後に発行する為の会合で、太田さんは同窓会会長として、私は編集常置委員として、お会いしました。記念誌上「わたしたちの『野田の郷』」に記載した、船津橋遺蹟出土の丸木舟実物を見る為、車を手配して下さり、酒井亮介さんと一緒に大阪城本丸内、大阪市立博物館（元陸軍第四師団建物）一階廊下にあった古代の刳船くわふねを見学、お陰様で寸法採りと写真撮影が出来ました。

また貴重な資料（堂島大橋設計図・下福島公園経緯等）を、気安く提供して頂き大いに助かった事が再三あった。福沢諭吉誕生碑の現在地への復元、諭吉肖像二度目の一万円札A七号券の入手にも故井形正寿氏とともに尽力されました。

私が大腸癌を患って、抗がん剤服用中は、乾杯の音頭を取って飲み残した私の杯を、さり気無く横から手を出して、片付けて下さいました。

よく気が付く優しさと気配りに、利他を身に付けた性格と信条を、お持ちだったと思います。

本会の活動にも、顧問時代からよく纏めて頂き、会の『顔』

として、まだまだこれからのご活躍を願っていた矢先、誠に惜しまれてなりません。

今も思いを致すと、どうしようもない虚しさ、悲しみに襲われます、故人への追悼と、つつしんで、ご冥福を祈るものです。



2007年12月10日 福沢諭吉誕生碑 復元式の日井形さん（左）と

太田会長の思い出

事務局長 末廣 訂

先般逝去された太田会長について、生前歴史研究会でご苦勞いただいた思い出を述べてお礼に変えたく思います。

私は太田会長のことを会長と呼んでみたり、先生と言ってみたりしましたが、これは長い間大阪市議員をされると同時に、我々の会が発足当時から陰に陽に苦勞された思い出を持っているからだと思います。

また、会長はもともと野田の出身ですが、もう長い間同じ海老江東に居られ、いわば近所付き合いに近い関係もあり、特に当会で、顧問から会長になられてからは、頻繁に相談や話し合いをした思い出があります。

少し今までの会の歩みに触れてみると、私が井形さんから平成二二年二月に事務局長の席を引き継ぎ、その後二代目羽間会長（初代は宮本武会長）が二三年一二月に亡くなられたあと、二四年の総会で太田会長、岡倉副会長が選出されました。

会員数の推移を見てみると、平成一六年二五名、一九年が二七名、二三年が三二名、二五年二月に四四名となり、今年の名簿では五〇名になっており、太田会長の会員増強努力の跡がよく出ていると思います。

会の運営というか、行事や活動内容を見ると

月例会（企画会議） 平成二二年九月の第三木曜日に開始（当初は図書館郷土資料展示室でし、のちには区民センター会議室で、ほぼ毎月一五名前後の出席者、Eメールで議事内容を報告。

理事制から幹事役へ 平成二四年二月の総会で従来全員が理事から幹事制度に変更した。

以後幹事中心に、地域担当役、各種行事担当役等を導入。

セミナーの導入 第一回セミナーを平成二四年四月、玉川コミュニティセンターで開催、昨今は年二〜三回の頻度で開催し、定着している。

会報の発行 創刊号を平成二五年一〇月に発行、今年秋に第九号発行。

郷土資料の展示 従来福島図書館で開催していた展示会場が、福島区役所の新庁舎ができて（平成一九年落成式）以来、会場が区役所と二か所になった。また、従来井形氏所持品中心の展示から会員が新規作成したものを展示するようになった。

会のHPの開設 会の広報を中心にホームページ開設（平成二二年二月）。年々内容も充実し、会のPRに役立っている。

講演会の変遷 井形事務局長が長らく実施されていた「戦争を語る会」を継続し、

記念行事 折り目に講演会を開催（区創設七〇年、松下幸之

助生誕一二〇年など)

会発足三〇周年行事 昭和五七年活動開始以来三〇年を迎えて、平成二四年末に記念誌『なにわ福島ものがたり』一三〇〇冊を発行、二六年に加筆版を発行。同時に記念誌発行記念懇親会、三〇周年記念パーティを開催した。

現在、会では来年の発足三五周年記念に向けて、田辺聖子生誕記念碑建立計画やその他の行事を企画会議で検討しているところである。

以上簡単にこの五・六年の会の歩み、催し等の記録を記しましたが、大きく活動内容が変わってきて、また活発に会員が事業参加し、充実してきたことがわかります。

特に太田会長は、長い間、大阪市の仕事に携わってきておられたので、顔が広く、また福島区全体の歴史、事象の成り立ちに詳しいので、些細なことでも気軽に、丁寧に応えていただいたことが大きな財産になっています。

そして、三〇周年の記念誌に、「なにわ八十島から福島区への歩み」と「福澤諭吉と福島区」の二編を執筆いただき、また会報発行には積極的に投稿していただいたが、今後その機会がなくなつたのが大変残念です。

会報に載せていただいた内容は次の通りです。

創刊号で「区の花「のだふじ」が選ばれるまで」。

第四号では、「阪神・淡路大震災―二〇年前のこと」。

第五号に「六五年前の大台風―福島区に大被害」―昭和二五年のジェーン台風のことを述べている。

第六号では「福沢諭吉記念室―誕生の秘話」―として福島図書館にある記念室（郷土資料展示室）の経緯の記述。

第七号では「福島消防署・警察署の竣工と区民センター・図書館完成への苦労話あれこれ」。

第八号に「福島区役所の変遷と劇的なドラマ」では将来の福島区に行く末について心境を記されました。

この第九号では遺稿になってしまった原稿まで残され、我々区民にとって、身近な歴史と変遷に触れることができたと思っており、貴重な記録を残してもらい感謝したい。

私もよく知らなかったが、一〇年ほど前に大病をされたが、その後元気になられ、いろんな業界の世話役をされていました。しかしここ二、三年前ぐらいから頻繁に病院通いが増え、体重も少しづつ減るよう見え心配をしていました。

そんな中で、歴史研究会の行事や催しには積極的に参加され、二、三思いつくと、

田辺聖子さんの記念碑の話が出ると、区長に早速公園での建場所の交渉や、東大阪市の出身学校で田辺聖子文学館がある樟蔭女子大学へ一緒に訪問し、学校からの紹介で東京のご自宅の連絡等の橋渡しができたこと。

また塩野義製薬研究所や大日本製薬大阪工場の閉鎖後、会員で見学し参加者全員で写真を撮ったこと。そして、昨年末のNHKテレビ「探検バクモン」に一万円札A7号券について大きく取り上げられたこと。今年三月、吉野の佛光寺さんでのセミナーでは、当初三〇分ぐらいしか参加できないと伺っていたが、最後まで席をあたため、積極的に発言されたのが会行事の最後でした。

多くの業績、思い出を残されましたが、まだまだこれからの人生、やり残した仕事があったと思いますので太田会長ご本人にとつて、さぞ残念であると思います。

また我々会員も大変大きな星を失った思いです。心からご冥福をお祈り申し上げます。



平成二四年二月一八日
総会（丸一酢にて）の記念撮影

父、太田勝義は大阪市と福島区が大好き

大阪市長議員 太田晶也

福島区歴史研究会から、父の追悼記念誌に思い出の寄稿を依頼されたが、たいへん困った。

父は歴史研究会の会長、保護司会の会長、大阪市長議員、様々なボランティアを歴任しており、そのため当然多くの方々とも密に接していた。しかし、私にとつて太田勝義は父なので、他者からその人となりを聞かせていただくことはあっても、その人物像を歴史研究会の方々にお伝えすれば良いのか、正直言つてピンと来ない。だから、思うままに書くことを許して頂きたい。

私が述べるのも変だが、子供の頃の父太田勝義は、とにかく強く正しく大きく、物知りでまさにスーパーマンのような存在。とはいえ、家の中ではいつもステテコでゆかた姿。芸術など文化や歴史、旅行、阪神タイガース、お酒とお刺身が大好きな人だった。

父は子供だった私たち弟妹とよく遊んでくれた。忙しかつたので、遊びに連れて行ってもらった記憶はあまり多くないが、夕食後の暗い夜道を怖がる私たちを、淀川河川敷や近所の公園

へ連れて行く「探検」という名の散歩をしてくれた。家の中では、銀玉鉄砲での「戦争ごっこ」や「相撲」も取ってくれ、寝室では膝を立ててすべり台になってくれ、眠るぎりぎりまで遊んでくれた。

小学生になるとよく学校のことを話した。ある日、私は父に「毎日パンばかりの給食は嫌だ」と愚痴を言った。後に米飯給食が導入されたが、父はこの時の会話を、米飯給食導入のために市会での質疑に引用していた（議員って凄いなあ。私も市民のための政治家になりたいなあと思った、政治家を志したきっかけである）。

その後、父はガンとなり、私が後を継いで議員になってからは、私との会話は圧倒的に大阪市政についてだった。頭の中にはいつも大阪市や福島区のことだった。先の大阪市廃止の住民投票が悔しくて、腹立たしくてたまらなかったのだろう、他界する一ヶ月前でも橋下さんや維新の会を恨んでいた。一方、誰よりも大阪市と福島区が大好きで、家族や支援者、福島区歴史研究会の方々に心から感謝し、愛していた。

私は、そんな父から「ご苦労さん。ありがとうなあ晶也」と言ってもらえる息子（人）にならなければならないと思う。

福島区のインフラの充実に

貢献した故太田勝義先生

藤 三郎

平成二四年の総会で太田先生が福島区歴史研究会会長になられて以来約五年間で本研究会の会員数は二倍の五〇名に増え、また会報の発行、セミナーや講演会開催、展示の充実など歴史研究会としての活動は急速に充実してきました。いつもにこやかな顔でお話しされていた姿が思い浮かびます。志半ばにして急逝されたことは本当に残念です。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

この度、追悼特集を発行するにあたり、大阪州市会議員としての業績と人となり、第三代目の後援会会長として、長く先生の活動を支えてこられた(財)大阪市コミュニティ協会・福島区支部協議会会長・高瀬善方氏にインタビューいたしました。同氏は「先生は自分の身内のように思っている。福島区に残されたその功績を、誰かが記録にとどめねばならないと気になっていたが丁度よい機会だ」と、先生が福島区のインフラ基盤作りのために全身全霊を捧げてこられた姿を約一時間にわたり淡々と語られました。以下はその内容を筆者が編集したものです。

先生は政治に対して非常に熱心で、若い頃から野田地域で知られた存在でした。自民党の青年部に所属し、いつか市会議員なり府会議員として政界に打って出たいとの志を持っておられました。当時、野田に坂本先生、吉野に荒木先生という自民党の常連の市会議員がおられました。坂本先生が引退された時、中山正暉先生のご推薦で補欠選挙に立候補されましたが落選しました。その後海老江に住居を移し選挙基盤を強化し、本選挙で当選されました。

以上は約四〇年前のことです。健康上の都合で六年前に議員をやめるまで、八期三二年余にわたり市会議員を務められました。

当選した当時は海老江東の坂本善九郎氏が、次いで野田の浜捨三氏が後援会会長をされていましたが、その後高瀬氏が後援会長に就かれました。先生は体格が立派で一見偉そうに見えるので、人気投票でもある選挙に勝つためには、やさしい顔をして出来るだけ頭を低く下げるようお願いされたといえます。先生は福島区のために細かいことをこまめにこなされましたが、一方では役人にはこわもてで、よく顔が利きました。以下に先生が福島区に残されたご業績の一端を示しました。

平成七年、阪神淡路大震災があったとき、それまでは「ビンカ・マリーゴールド・バラ」という平凡な花が「区の花」でし

た。故植本要次郎氏が福島区連合町会長、高瀬氏が副会長になった時、先生の尽力もあり、野田福島に長い歴史がある「のだふじ」を福島区の花に変更する提案を両名でしたところ、全連合町会長がこれに賛成し満場一致で決まりました。現在「のだふじ」は区内各所に咲き大阪の藤の名所として有名になり福島区の町おこしに大いに貢献していますが、この時「区の花」に指定されたことがその根本にあることは忘れてはならないと思います。

その頃、各小学校を建て替える時期で、他の区と競い合いであつても福島区が優先されました。大阪市の施設の建て替えは順番があり、例えば建物の耐用年数が三〇年とすると、三年くらい前になると、いち早く学校施設を充実するように先生が熱心に大阪市に働きかけられた結果、区内九校の建て替え工事は順調に進みました。新しく建て替えられた近代的で安全な校舎からは、毎年小学生がすくすくと育っています。吉野・玉川小学校の入り口には、「のだふじ」をあしらった美しいステンドグラスの飾り窓が設置されました。これらは学校に潤いを与えています。

区役所の建て替えの時期が三年後とか四年後に決まっていた時、どこに建てるか、現状の場所（今の区役所の「北港通」を挟んだ前）に建てるか、または他の場所に建て替えるか問題に

なりました。旧区役所の跡地に建て替えるとすると一旦仮庁舎を作らねばならず、これには数億円がかかる。たまたま向かい側に（株）阪神住建が八〇〇〇九〇〇坪のジャスコの跡地を持つていました。ここに新しい区役所建屋を建てるべく、大阪市の同社から買い上げるように働きかけられました。しかしなかなか大阪市は同意せず、紆余曲折はありましたが結局先生の力で大阪市に購入させることに成功しました。こうして区役所・消防署・警察署・西野田幼稚園が現在の一角に次々に整備され福島区の官庁街が出来上がりました。

また大阪市では小学校下一カ所にコミュニティセンターを造るという目標で助成金を出して推進を計っていたのですが、福島区は用地難のため一〇地区のうち四地区しかありませんでした。そこで太田先生にお願いしたら公園用地や他の公共施設の利用により全地区に完備し、地域各種活動の基盤となつていきます。

以上のような、長年の市政への功績により平成一〇年、第九代大阪市会議長に就任されました。また今年五月、正五位旭日中綬章を追贈されました。これは亡くなられたあととはいえ、喜ばしいことであります。福島区を歩くと、先生が力を入れて充実してこられた諸施設がそこそこに見られます。それらは往

時の先生を偲ぶモニュメントであります。そのことを思い浮かべて生前の先生を偲んでいただければ大変うれしく思います。



二〇〇七年九月一四日 式典で

左から太田会長を中心に 岡倉・末廣・藤・清水会員

太田会長を悼む

宮本降正

平成一九年二月の福島区歴史研究会総会を、行ったことのない君のところで開催してほしいと、太田会長より声をかけられ、当時の会員二〇名位で、手狭ながら拙宅で催したのが大変懐かしいです。

又、大阪市立野田小学校の同窓会会長として、人脈の広さを活かし、創立一一〇年記念同窓会を盛大に開催されましたのも良い思い出です。

太田会長は、本当にバランス感覚に秀でた人だと感じ入りました。

心よりご冥福をお祈りいたします。

2度目に福沢諭吉が肖像に選ばれた
新1万円札A000007A号券の交付式にて

2004. 11. 4



太田会長の思い出

大平雄喜・幸子

この度は太田勝義会長がお亡くなりになり、心からお悔やみ申し上げます。お亡くなりになり改めて、生前歩んでこられた人柄や業績の偉大さを感じております。

私共夫婦が五年少し前、福島区歴史研究会に入会してから日も浅く活動内容も希薄で畏まっていた時、いつも気さくに接して頂きました。入会后、少しは活動にも慣れてきた頃、私は講演担当、妻はセミナー担当の一員として役を与えられ、会長とも心を打ち解けあつて相談できるようになりました。

講演、セミナーのテーマ選びにも苦労したのですが、日頃から積極的に「こんななんどうやろ」といろいろと提案頂いた。

例えば、戦後七十年記念講演会には玉音放送に纏わるお話として、会長の近所にお住まいの元近衛兵の方に講師をお願いしたことや、会長が古くから昵懇にされていた元堀江新地最後の検番女将のお話など、固いテーマにとらわれず、身近なところから提案頂いた。

生きていらつしやれば、あんな話、こんな話と面白い人間味あふれるものがまだまだ出てきたものと思います。

ここ十数年前より、福島区では、ニュースポーツでもあり武

道でもある「スポーツチャンバラ」が広まりつつあった。今でこそ区長杯や区民まつりでも区民の皆さんに知られるようになったが、当時はまだまだであった。何とかしてスポーツチャンバラを福島区において盛んにしたいと思っていた私は、福島区歴史研究会での太田会長とのご縁もあり、無理を言って大阪市スポーツチャンバラ協会と福島区スポーツチャンバラ連盟の顧問になって頂いた。日頃の相談にもよくのって頂き、大阪市大会や福島区長杯にも出席頂いた。

歴史研究会の会員でもあり、スポーツチャンバラを推進していた私は、郷土史の研究テーマとしてチャンバラと結びつくものは無いものかと日頃から頭を捻っていたものの、これといったものは思いつかなかった。

刀と言うことでは、戦国時代に荒木村重が信長の命を受け海老江の八坂神社に奉納したという言い伝えや、野田福島における合戦があった話等、信長、秀吉、三好三人衆等有名人の名前が出てくるものの、大坂自体がそうであったように、福島における武士の人口は少ない。まして剣術やチャンバラに纏わるネタはなかなか発掘が難しい。

太田会長のご葬儀の日、ご参列者の待機テントの一角に、太田会長が活躍されていた頃の思い出の写真が掲示されていた。

その中に甲冑姿で立派な武将の姿をされていた写真があった。甲冑に帯刀されていた勇姿（次の写真）はよくお似合いで貫禄があった。会長も広い意味でのチャンバラ姿が好きであったのかと、尚更に深いご縁を感じております。



太田勝義略年譜

昭和17.8.17 野田で誕生（当時は此花区）

野田小学校・関西大倉中学校・関西大倉高等学校・
関西大学法学部政治学科卒業

54.4 大阪市会議員初当選（以後8期連続当選）

57.11 福島区歴史研究会設立に参加（顧問）

平成10.6 大阪市会議長（第93代）就任

11.11 藍綬褒章受章

19.11 地方自治60年記念総務大臣表彰

24.2 福島区歴史研究会会長に就任

29.4.24 死去

29.5 正五位旭日中綬章を追贈

保護司会会長など多くの役職を歴任、福島区の発展・歴史の継承に尽力した生涯であった。

野田地区の長屋現状数と民俗点描

岡倉光男

民間習俗の事象と今は無き建築物を、福島区野田地域より点描する。太平洋戦争での空襲被災が一部だけに止まった町並みは、今でも多くの長屋が立ち並ぶ。近年その長屋も壊され、更地に耐火建材・耐震工法による一戸建（三階造り）やマンションが急激に増えつつある。

野田の町を東西に貫く大野町通り（往時は野田新道筋・野田商店街）は、それまでの田畑地に、明治三三年（一八九〇）頃に開通したメインストリート、旧大阪市内地と西部の新興工場地帯を結ぶ大動脈で、多勢の人通りで賑わった。沿道の長屋は、明治三〇年前後に建てられ急激に町家を形成、人口増をもたらした。

現在殆んど知られていないが、野田地域に明治の終わり頃から昭和の初めまで芝居小屋が三館も在った。野田四丁目、妙見宮北側近くにあった主に浪花節が掛けられた「十六亭」。大野町通りを東へ抜けた右の利州（此花料亭の跡）の場所に「西野田文芸館」。船津橋北詰近くの、下福島「鶴の席」である。（注1）

二〇一六年九月一五日付け毎日新聞朝刊大阪版に「わが町にも歴史あり」の大野町通り対込町会内に鎮座している「お狸さん」こと源吉大明神の記事がある。名前の由来など分らないとあるが、以下、分かっている事を記しておく。

元々市場引き込み線の側にあつたのは確かだが、それ以前、何時の事だか近くの田畑を耕作していて、掘り出したと伝わる。過去何度も大洪水が襲ったので地中に埋もれてしまったのかも知れない。座像で高さ九〇センチ程あり、昭和三二・三年頃、対込町の当時、町会長で印刷・文具商をされていた、杉井進さんが小屋状祠を作って丁重に祀られた。その際、近くにお住いのＹさんという靈感に長けた小母さんが、お性根を入れる祈禱をされ、神がかりの状態で、「自分は「げんきち」であるぞよ」と名乗られたので、「もと」とも読める元ではなく、「源」吉大明神と名付けられた。後日筆者は、Ｙさん宅を伺ったが、ご本人にはお会い出来ず、息子さんの話では、お母さんは非常に勘の鋭い人との事だった。

その後、朝日新聞大阪版で地ダネとして取り上げられ、記者の感性豊かな記事で四国阿波のお狸か・・・と書かれていた。当地の沿革、野田城・阿波の三好一党進駐・後年阿波国人の入植・土着、お狸さんへと続く因縁を感じる。野田の町が先の戦争時、空襲にあつて、頭上に落ちてきた焼夷弾が中

央市場の方に流れたのは、お狸さんやお地藏さんが助けて下さったとの言い伝えがある。

次に「トンネル状路地」に付いては六〇年程前、野田地域には、トンネル路地が六本あつた。現在は、その内一本丈が残り、玉川地区にも一本（玉川三丁目九―九）が現存している。長屋の二階建ての一階部分が、くり抜かれたように通れる通路になっている。

野田二丁目一七―一二の山川薬局隣りのトンネル路地は、今は無くなった千成湯（銭湯創業・明治三八年〜平成二三年五月・廃業）や西野田公設市場↓気ララ野田（注②）への近道になる人達が、結構利用されていた。モルタルで被覆された側壁と天井、その天井に勘亭流で「雲」と書かれた半紙が昔日に貼られ、今でも古びて赤茶けた紙片が一部こびり付いている。これは先に記した杉井進さんが貼られたので、ご自身か印刷関係で出入りされていた歌舞伎関連の方が書かれたかであろう。心は、雲⇨空の意で通っている人の頭が、二階住居の人に踏まれていない。そして雲が竜を呼んで雨をもたらし、火事が出ない事を願う験担ぎに貼られているとのことである。トンネル状路地は、北の大火があつた明治四二年の大阪府建築取締規則で造れなくなったので、それ以前に建てられた長屋である。数か月前「空」と書かれた半紙が貼つて

あったが今は剥がれて見当らないが、その後新しく太字で墨書された「雲」の字が天井に貼られた。府庁に永年勤められた、野田三丁目在住のSさんが書道六段の腕を披歴された書体である。

野田の町 連なる麓 波のよう

寄せる人の和 優しさ満ちる

棟割の 長屋残れる 野田の町

世話好き人情 路地の温もり

木造の二戸以上連続する建物は長屋と称する、但し明治から昭和初期に建てられた瓦屋根土壁建築。(昔の僧侶や武家屋敷は除く)。火事の際類焼を招き易く、戦後は建てられていない(文化住宅等除く)。玄関などを補修して現在使われている町家長屋は、大阪市の昭和



野田三丁目の長屋

一五年の住宅調査では六一万戸余りであり、九割程度が貸家で総戸数の実に九五%が長屋建だった。(注3)先の太平洋戦争末期の空襲による戦災で大部分が被害に遭い、まとまって残っている市内の長屋地域は三〇カ所程に過ぎない。

今年平成二九年六月に調べた野田地域の残存長屋建築数は六一〇軒(戸)であり、(但し調査誤差が十一〇軒程あると思われる)目下の空き家(含む倉庫代わり)は四〇軒だが老朽化により増える傾向にある、調査時にも纏まって空き家八軒が撤去され更地になっていた。撰津製油(株)があつて、十一年程前、跡地にマンション「リバーガーデン福島」が建てられた野田六丁目地域を除くと、現在野田の町家四分の一が長屋のみである。長屋建てが一番残っている野田コミュニティセンター周辺の野田五丁目大二西町会は、二一八軒中五割強の一一五軒が長屋で、その内目下九軒が老朽化による空き家になっている。

大野町通りは九百メートル弱の長さがあり五十年前、両側民家の九十数パーセントが長屋であったが今回の調査で民家二四一軒中、長屋の佇まいを今に残しているのは三〇パーセントの七九軒になっている。大通りと後で埋められて道になった井路川に沿って建てられた為、スプロール(不規則)な家並みと、その路地(ロージ)は子供達の格好の遊び場で、

男の子は「べったん」や「ラムネ（ビーダマ）」「独楽回し」の他、二手に別れて逃げる組と追跡組の遊びは「探偵ごっこ」「五人の斥候兵（注4）」と言い。女の子は「ゴム飛び」や「鬼ごっこ」、地面に線を引いて「缶（石）蹴り」など賑やかな遊び声が周囲の家にこだましていた。

今やレトロな観が漂う野田五丁目二の長屋地域は、エアコンの普及する前は、夕方家の前に床几が出され縁台で涼みがてらの将棋、往時玄関前にカンテキ（七輪）を出して魚を焼く中年男は正に、佐藤春夫（詩人・作家）の「秋刀魚の歌」を彷彿させる雰囲気而今に残している複数の路地である。長屋住まいに心惹かれて野田三丁目に引っ越してこられた、画家のNさんの様な所帯の方も居られるが、以後の補修にも限度があり、今後五〜六〇年経てば他府県共、全ての実用長屋が無くなって、移築大補強された都市型住居の歴史展示施設丈になる日が、訪れると思われる。

（注1）昭和四三年一月二五日発行「野田新報」創刊号と明治四二年一月二九日付「大阪朝日新聞」による。

（注2）大阪市立野田小学校『創立一〇〇年記念誌』平成一五年三月発行の一三三〜四頁に詳しい記載。同一三八〜九頁に宮本隆正さん執筆「野田の長屋」の解説あり。

（注3）『大阪新・長屋暮らしのすすめ』橋爪紳也・編より 第六章「大阪の長屋」和田康由 創元社 二〇〇四

（注4）一九三八年、同名の映画が上映され、早速子供達の追跡遊びの冠となる。

野田5丁目の長屋群、大屋根の瓦、約半数が葺き替えられている（普通は雨が漏れてから直す）

2017年6月撮影



「写真で巡る野田村」

―平成二九年第一回セミナー―報告―

宮本隆正

日時 平成二九年三月二六日(日) 午後二時～四時

会場 佛光寺会館(福島区吉野一丁目)

講師 鈴木和夫氏

テーマ 写真で巡る野田村

―野田の隠れた遺産を語る―

参加者 二六名(会員一六名・一般一〇名)

鈴木和夫氏のプロフィール

昭和二六年福島区に生まれ、若い頃から青少年活動・障害者関連活動に関わり続けながら地域諸団体に籍を置き、ここ最近「野田」の歴史・長屋・お地藏さんの魅力を多くの人々に知ってもらおうと旅程管理主任者の資格を取って「まち歩き」のガイドとして活動されています。

講演内容

最初に当会所有の一万円札(七番)の話を出して会場の雰囲気をつかまれ、今までに延べ六百人をまち歩きに案内されたとのことでした。以後はテーマに沿って約一五〇枚の写真

を駆使されて、野田の町を実際に歩いているかのように錯覚する鈴木ワールドに会場は引き込まれました。ただ、昭和二六年生まれの鈴木氏より先輩の方々が会場におられ、写真の説明に対し突っ込みを入れるなど、和気あいあいのうちにセミナーは終始しました。

以下、写し出された主な写真を列挙します。

国鉄野田駅、ミツヤ(小儀氷店みつや)、野田商店街(平成二二年三月末解散)、栄湯、前田産婆院、野田小学校の南北の石畳、妙見筋、妙見宮、大森屋
本社、野田緑道(旧引込線)、富島渡(昭和五七年廃止)、貸本屋
駄菓子屋、長屋、虫籠窓、トンネル路地、旧大野湯、旧千成湯、みどりや、旧石黒邸(経営していた隣のブティックに京唄子が服を注文)、濱邸(庭園)、加藤邸、梶川邸(銃弾跡)、北村邸(洋風建物)、旧池永邸(旧家)、堤はし跡、三角表札(四〇年前に出現)、撰津製油、芦分小学校跡碑(野田出張所内)、恵美須神社と道標、不二昆布、極楽寺



と野田城跡等々。

これ以外にお地藏さんや大明神などが多数登場しました。特に長屋が多く残る野田において、鈴木氏は長屋に対する造詣が深く、長さが二七メートルを越えると建築法違反になるので途中で切断するなどには私には初耳でした。

終わりに

冒頭にも書きましたが、セミナー会場全体が和気あいあいのうちに終了したのは、ひとえに講師の鈴木氏の人となりでした。前から好奇心旺盛なのは存じておりましたが、まちなきにより、知識の蓄積度合いが急激に進んでいる事に唖然とし、あらためて敬意を表します。これからも郷土史研究家として活躍される人材に間違いなし。以前から鈴木氏を知る私には、資料の収集や聞き取りなど、彼の日頃のフットワークの軽さが結実したセミナーであったと思いました。

「野田」だけでなく、鈴木氏が過去に居住した福島区その他地区のセミナーも、近い将来是非聞いてみたくなりました。

このセミナーにご体調のすぐれぬ中、出席された当会の太田勝義会長が、四月二四日に永眠されました。当会に対し、最後まで並々ならぬご尽力をされました太田会長のご冥福を衷心よりお祈り申し上げます。合掌。

「二〇一七戦争体験を語りつぐ」

—講演と語る会の報告—

西 保國

日時 二〇一七年八月二日（土）午後二時～四時

会場 福島区民センター三階会議室

テーマ あのととき私たちはどう生きていたか

講師 福原佐一郎氏（福島区歴史研究会会員）

林 俊二氏（同右）

参加者 五四名

今年も福島区歴史研究会主催（福島区図書館・福島区役所共催）の「戦争体験を語りつぐ」講演と語る会が催された。今年のテーマは「あのととき私たちはどう生きていたか」というもの。その趣旨として、会への参加を訴えるチラシに「七〇余年前、福島区民の日常は戦争と背中合わせでした。家人を戦場に送り、愛国を論じ、ある時は戦果に酔い、そして戦死者に涙したものです。勤労奉仕、物価統制、学童疎開、消火訓練、空襲など、今では想像できないような現実もありました。安全保障問題がクローズアップされる今日、戦争体験を忘れないよう、お二人の『かたりべ』にお話しいただきます。」とある。

一 講演内容

講演に先立ち、港区が製作したビデオ「大阪港周辺と港区 戦争と自然災害を乗り越えて」の一部が上映された。福島区を直接扱ったものではないが、福島区でもあったであろう当時の様子子を彷彿させる内容であった。

最初の講師は林氏。氏は昭和一一年生まれで、当時の戦況や社会の状況のあらましを紹介された後、ご自身が体験された空襲について詳しくお話しくださった。本報告はお話の概略しか紹介できないが、そのあらましは次の通り。

- ① 昭和一九年に建物疎開の法律ができ、自宅がその対象とされて無造作に取り壊されたことがとても辛かったこと
- ② 小学二年生（昭和一九年）のとき、学童疎開の予行演習があったこと
- ③ 校門にルーズベルトとチャーチルを模したサンドバックが設置しており、生徒はそれを殴ってから登校していたこと
- ④ 昭和二〇年一月から大阪への空襲が始まったが、六月の空襲で講師の住む港区の街の大半が被災し死傷者も多くで大変な思いをしたこと。ここでは、次のようなエピソードが語られた。
 - ・ B 29の波状攻撃があり、たくさんの敵機が襲ってくる姿、投下された焼夷弾の音に恐怖心を抱いたこと

・ 焼夷弾により建物はおろか電信柱までもが焼失したこと

・ 火災の際の上昇気流で竜巻が起こり、燃え残ったトタン板が空に舞い、それで死傷した人がいたこと。また、墨汁のような黒い雨が降ったこと

・ 着ている服に火がついたり、火災の熱風で水を求める人が引きも切らず、河原では人が折り重なるように死んでいったこと

・ ご自身のすぐそばに焼夷弾の一部が落下し跳ね飛ばされてしまったこと

・ 使わせてもらっていた隣家の井戸の瓦礫の下に近所の人埋もれていることも知らずに、異臭がするまでその上を平気で通っていたこと

⑤ その四日後に神戸が空襲を受けたが、大阪からもよく見え、怖かったこと。敵機 B 29 を攻撃しようと日本機が出てきたが逆に撃ち落されてしまった目撃談

⑥ 父親の里である愛媛県に疎開したが、途中の港々では船が煙突だけを海面に出して沈んでいたこと

⑦ 疎開先といえども、苦勞の連続であったこと

福原氏は、昭和七年生まれで、小学校時代広島へ学童疎開されたときの経験を述べられた。その概要は次の通り。

① 教科書も新聞紙のような粗末なもので、勉強できるような

環境にはなかったこと

② 子どもたちの日々は、空腹や蚤対策に悩まされ通しで、勉強どころではなかったこと

③ 大阪に帰りたくて仕方がなかったこと

④ こんな悲惨な状況を繰り返してはならないこと

*福原氏は『会報 第二号』に「七十年前」を執筆、

参照してください。

二 質疑応答

七名の方からご質問、ご意見の申出があった。質問は、①建物疎開の状況はどうであったか、②空襲がひどくなったことで大人たちの戦争に対する考え方に変更があったか、③疎開先でも空襲があったのか、④福島区における空襲の実際を知りたい、というものであった。講師からは、当時は小学生であり、体験の範囲も限られているとお断りの下で真摯な回答がなされたが、いずれにしても我々の知らないことは多く、たくさんの方に色々なことを語り継いでいってもらわなければならないとの思いが募った。

意見は、ご自身の体験談のご披露であった。

お一人からは、皇紀二六〇〇年（一九四〇）に中学校に入学し、四年生から勤労動員に従事したこと、徴兵検査は甲種合格だったが入隊直前で終戦になったこと、入学者二九三名中卒業者は一六八名に過ぎなかったこと、戦後一生懸命に家を守って

きたことなどのお話があった。

もうお一人からは、お正月でも晴れ着を着ることは憚られたこと、学校ではなぎなたや木刀の教練があったこと、毎月一回武運長久を祈願する行事へ動員されたこと、マニラが陥落したとき提灯行列で祝ったことなど、当時自分はいわゆる軍国少女であったということの「告白」があった。

戦後七〇余年を過ぎ、戦争体験者の数が減じつつある中、このような貴重な体験を埋もれたままにすることはできないと強く感じたことであった。



林講師



福原講師

内藤会員がテレビに

内藤真治さんが、終戦記念日八月一五日、毎日放送テレビ「ちちんぷいぷい」に登場。

淀川大橋に残る銃弾の紹介のあと、内藤さんが環状線福島駅周辺の橋脚の銃弾跡の説明と、戦争のない世の中、平和な時代の続くことを願うと語りました。

福島区歴史研究会会員として地域の講師などされた方は
事務局までご連絡ください

古い写真を探しています

お手元のアルバムをひもといて

災害や今はない建物などが

写っているものがあれば

ご提供ください

会員の原稿を募集します！

福島区の記録を残しましょう



福島区歴史研究会 2017年上半期の事業

展示「海老江の今昔」2016.10.11～3.31 会場・福島区役所

『福島区歴史研究会会報 第8号』発行 2月

展示「区の花 のだふじの今昔」3.14～6.30 会場・福島図書館

セミナー 平成29年第1回「写真で巡る野田村」3.26

会場・佛光寺会館

展示「福島区の祭りとお地蔵さん」

4.10～9.29 会場・福島区役所



セミナー 平成29年第2回 「阪神電車初代社長・外山脩造」

6.25 講師・平尾正氏 会場・福島区役所

2017年 上半期の活動記録

- 1.19 企画会議
 - 1.21 「玉川ウォーキング」吉川会員・福原会員が案内
 - 2.16 役員会
 - 2.18 総会・懇親会
 - 3.3 展示資料準備（区役所倉庫）
 - 3.10 展示作業（図書館）
 - 3.16 企画会議
 - 3.26 懇親会
 - 4.7 展示作業（区役所）
 - 4.20 企画会議
 - 5.18 企画会議
 - 6.15 企画会議
 - 6.25 懇親会
- ★浦江塾（協力）2.4 3.4 4.1 5.6 6.3

ホームページ <http://o-fukushima.com/rekishi/top.htm>

（会報バックナンバーも掲載）

（印刷：谷口印刷紙業）